

中央アジア・オアシス地帯における都市の成立と展開 —ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査(2021年度)—

ベグマトフ・アリシエル ベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミー研究員

宇佐美智之 立命館大学助教

ラフマノフ・ハウスニディン サマルカンド考古学研究所研究員

サンディボエフ・アリシエル サマルカンド考古学研究所研究員

ボゴモロフ・ゲンナディー ウズベキスタン科学アカデミー民族考古学研究センター・上等研究員

ミルザアフメドフ・シロジ サマルカンド考古学研究所研究員

The Formation and Development of Cities in the Oases of Central Asia: Excavations at Mingtepa in Uzbekistan (2021)

BEGMATOV, Alisher Berlin-Brandenburg Academy of Sciences, Research Fellow

USAMI, Tomoyuki Ritsumeikan University, Assistant Professor

RAKHMONOV, Husnidin Samarkand Institute of Archaeology, Research Fellow

SANDIBOEV, Alisher Samarkand Institute of Archaeology, Research Fellow

BOGOMOLOV, Gennadiy Uzbekistan Academy of Science, National Center for Archaeology, Senior Research Fellow

MIRZAAHMEDOV, Siroj Samarkand Institute of Archaeology, Research Fellow

1. はじめに

ミングテパ遺跡(39°47'32N 67°10'11E)はサマルカンド市(アフラシアブ遺跡)から約20 km北東、ジョンボイ(Jomboy)地区コラモイン(Qoramöyin)村の北西部に位置する。北にはゴブディン(Göbdi)山脈があり、北側にはザラフシャン川の支流であるブルングル川が流れている。周辺地域の中でも比較的水が豊富な地域である(図1)。

ミングテパはウズベク語で「千の丘」を意味し、面積は約35 haである。遺跡の北側には特徴的な2重の城壁が設置されている。外側の長さは約200 mで、内側は300 mを超える。遺跡南側に位置するシタデル(中枢機能をもつ地区)は周辺の平坦地から約12 mの高さで、面積55~60×55~60 mの規模である。北・東・西の3方位をシャフリスタンに囲まれ、南側に城壁をもつ構造をとっている。遺跡を南北に二つに隔てる道路が東西方向に通っている。城壁より外(特に東西に)ラバードと推定される地区が広がる(図2)。

なお、漢文資料には、サマルカンドの衛星都市として栄えたカブダン(魏書や西域などで伽不單國、都伽不單城または劫布旦那と表記される)が見られるが、この遺跡をカブダンに比定する見解が有力である。また、カブダンは漢文資料から曹国とも知られる。大唐西域記からはカブダンについて「周千四五百里、東西

長、南北狭、土宜風俗同颯秣建國」という記述が窺える。

ミングテパ遺跡については、H. Akhunbabaev氏が1983年に調査を行い、遺物から5~12世紀の間に人々の生活があったことを指摘した(Akhunbabaev 1983)。また、都市の立地や規模などを基に、Akhunbabaev氏が漢文資料で記録されるカブダン(伽不單)に当たると推定したのが最初である(Akhunbabaev 1983, 1990)。その後、2014年にA. Atakhojaev氏とS. Kubaev氏が遺跡のシャフリスタン地区で試掘調査を実施した。この調査中には土器片と1点の貨幣が出土しており、土器片は6~8世紀と11世紀のものと推定し、貨幣は7~8世紀のものと説明されている(Atakhojaev & Kubaev 2014)。さらに、2017年には、H. Rakhmonov氏がシタデルより約100 m西にトレンチ(Tr N3)を設け、発掘を実施した。その結果、アーチ型の通路があることが確認されたが、床面の確認には至らなかった。このトレンチからの出土遺物については全て7~8世紀のものと推定された(Rakhmonov et. al. 2021)。

2. 第3トレンチ(Tr N3)の発掘調査結果

2021年度の発掘調査は、第3トレンチ(Tr N3)の発掘から実施した。本来の規模9×4 mを東に2 m、西に1 m拡張し、9×7 mの規模で発掘調査を進めた

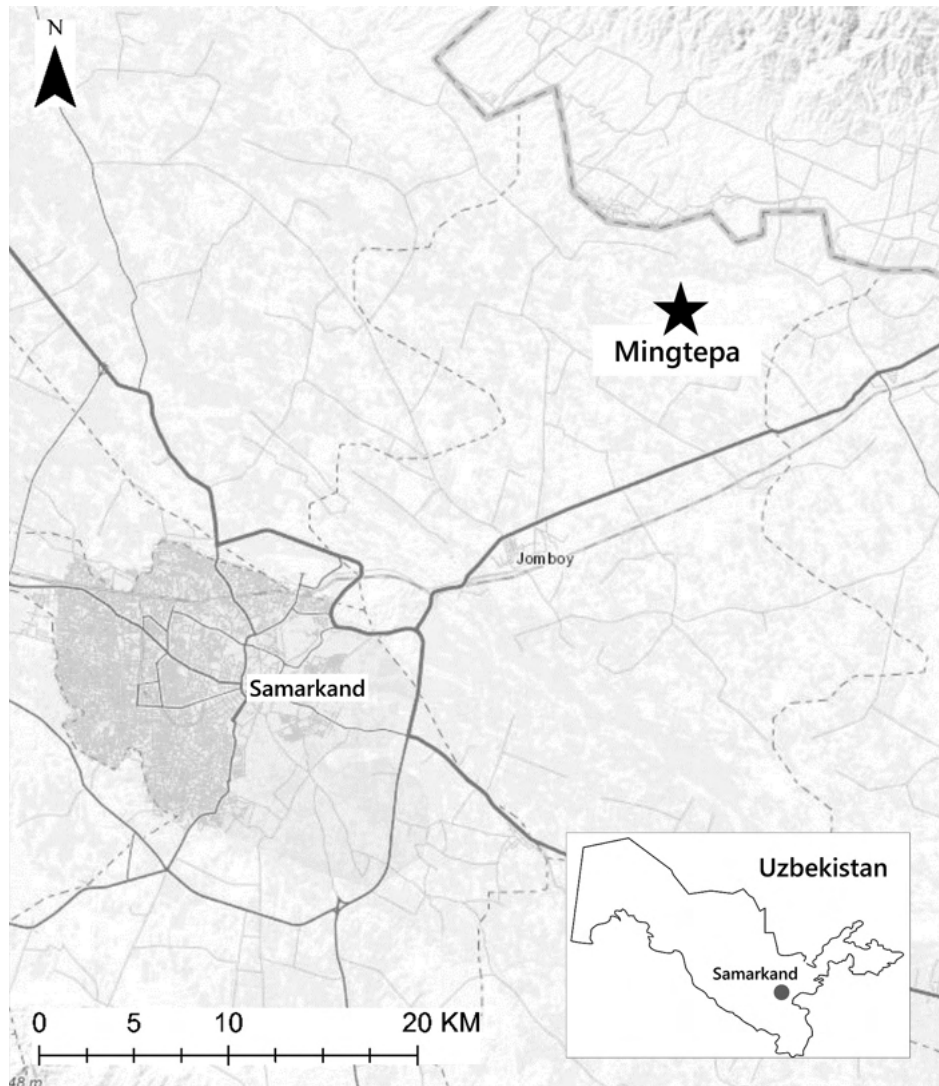


図1 ミングテパ遺跡位置図

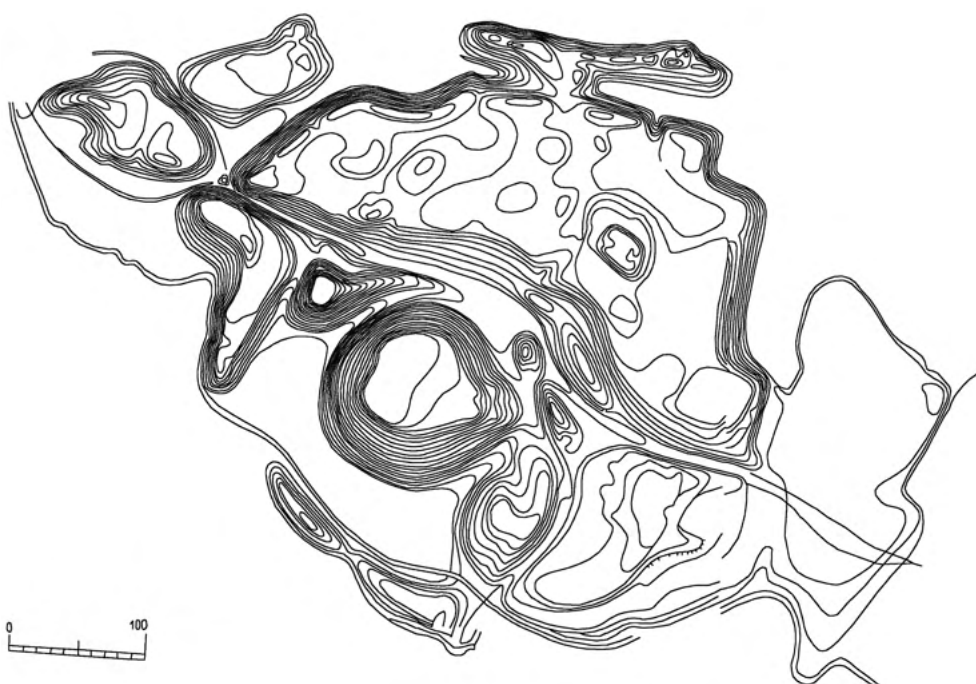


図2 ミングテパ遺跡全体図



図3 第3トレンチの発掘開始時の様子



図4 第3トレンチの床面まで完掘した状態の全体図

(図3)。その結果、この遺構の床面まで確認できた他、通路や部屋などの規模や配置などが明らかになった。

このトレンチは3.1、3.2、3.3、3.4の4つの区画に分けて、出土遺物などの記録を行ったが、東側(3.3と3.4に分立された区画に当たる部分)には長さ約9mで幅約2.5mである通路があることが判明した(図4)。西側の壁は保存状態が良好であり、漆喰もよく残存する。その厚さは約5cmである。弱く被熱した様子が窺える。床面も被熱した部分が見られる。床面からは、焼成されたタイルが一点出土し、そのサイズは28.5×21.5×3cmであった。また通路には、その屋上部から崩れ落ちたと推定される日干しレンガが一定量確認され、そのサイズは52×26×8cmであった。床面から約2.5mの高さのところに、4cmずつ内側へ入れ込めるアーチの部分が見られる。下から一つ目は幅60cmであり、もう一つは40cmである。アーチを建

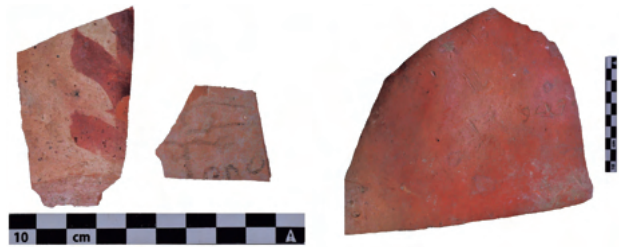


図5 第3トレンチ出土土器片



図6 第3トレンチ出土小像とランプ

設する技法がよく確認できるようになっている。

西側にもアーチ型の遺構が見られるが、この部分は二つに分けられており、南部から3.1および3.2と符合した。3.1区画は、南北に2.6mである。北部には高さ1.7m幅55cmの出入りが検出された。部屋の東の壁(中央の幅約2m)は全体的に確認されたが、西側は来年以降継続して発掘する予定である。この部屋の床面は、トレンチの表面から約4.3m下にあった。3.2は長さ約3.5mで幅約1mである。

出土遺物についてであるが、第3トレンチからは大量の土器片や動物の骨などの他に貨幣や小像などが出土した。土器片は7～8世紀のもの推定され、ソグドとその隣の国ウステルシュアナの特徴が見られる。中にはこの地域の特徴の可能性がある興味深い文様やソグド文字を伴うものも確認される(図5)。

また、ランプと兵士だと推定される小像の上部が出土した。この小像はペンジケントの壁画に描かれた兵士を想起させる(図6)。

さらに、貨幣が2点出土し、内1点は保存状態が良好であり、ソグド文字の銘文がr'mcytk βyy「ラームツェート神」と読める(図7)。Smirnova(1981)のソグド貨幣カタログ(1392～1418と符合される)貨幣と同じものである。Smirnova氏は、この銘文の二つの興味深い読みを提案しているが、r'mcytkの方が正確であろう。また、同氏は貨幣のタムガがペンジケント出



図7 トレンチ第3出土貨幣



図8 第4トレンチの発掘開始時の様子

土貨幣のタムガと西突厥可汗の貨幣のタムガに類似することを基に7世紀終わりから8世紀初めのものと推定している。

3. 第4トレンチ(Tr N4)の発掘調査結果

このトレンチは、第3トレンチより約370m東に位置する。近隣住民がブルドーザーなどで土壌を削り取った結果、上の層は破壊された。本調査では断面が見える一部を選び、約5×3mのトレンチを設けた。その結果、二つの部屋の遺構が検出された(図8)。

一つ目は、幅約1.15mであり、アーチ型の通路である。その床面は、約4.3m深くにあった。現在把握されている長さは2.8mである。南側の壁は日干しレンガとパフサブブロックの組み合わせになっている。パフサブブロックの高さは約90cmであり、下には6~7列の日干しレンガ、そしてその上に5列の日干しレンガ(50~52×25~26×8cm)が敷かれている。日干しレンガのサイズはアフラシアブ遺跡の7世紀のものと推定される日干しレンガと同様である。北側の壁は日干しレンガでできており、残存する高さは1.16m、幅は1.13mである。二つ目の部屋は2.35×2.7m、床面は3.8m深いところにあり、隣より約50cm高いことが判明した(図9)。

4. おわりに

本発掘調査の結果、第3トレンチ内の遺構配置が良好な形で把握されたことは大きな成果の一つである。



図9 第4トレンチの完掘時の全体図

今後の遺跡内部構造の復元において、重要な意味をもっている。また、壁に被熱した状況も確認されており、近年サマルカンド南東付近所在のカフィル・カラ遺跡(上記)で把握された火災痕跡に似たものかどうかは今後の優先的確認事項である。さらに、遺跡の時期についても、調査前段階での想定(初期中世期)が、出土土器や貨幣などの資料から裏付けられることとなった。このことは研究史的に大きな意義をもつと評価されるであろう。加えて、調査が床面(最下層)にまで到達したことにより遺跡の構造や時期がより詳しく議論できるとともに、次年度以降の調査に関して具体的な見込みを立てることも可能になったといえる。

第4トレンチの調査においても、興味深い成果を得ている。2.8mのアーチ状の通路が見つかったが、日干しレンガのサイズなどからみて7世紀頃と推定される遺構である。これも上記と同様、遺跡の盛行期を裏付ける資料として重要である。なお、多くの出土資料については、これから詳細な分析・分類や記録化を順次進めていく予定であり、本報告で示したのはその一部である。

以上、本調査で得た主要な成果および意義について述べた。総括するならば、今回の調査を通して遺跡の盛行時期や床面(最下層)を確認できたことで、従来の漠然とした想定としてではなく、実資料にもとづき、ミングテパ遺跡が初期中世期の有望な遺跡(Kabudhanに比定)であった可能性を具体的に議論できるようになったことは、重要な成果であったといえる。また中央アジア・オアシス地帯における都市の成立と展開を考えるうえで有意義な資料となる。

■参考文献

- ・ Atakhodjaev A. Kh., Kubaev S. Sh. 2014 Report on the archaeological excavations at the Mingtepa monument in Jam district

of Samarkand region in 2014. Institute of Archeology of the Academy of Sciences of Uzbekistan. Ф.4. О.1. Д. 335. Samarkand, pp. 4–18 (in Russian).

- ・ Akhunbabaev Kh. G. 1983. Archaeological study of the Bulungur area in 1979–1980. *History of the material culture of Uzbekistan. NI8*: 154–165. Tashkent (in Russian).
- ・ Akhunbabaev Kh. G. 1990. Ancient Kebudanjaket: to the question of localization, genesis and stages of development of early

feudal domains and medieval rustaks of Samarkand Sogd. *Archaeology of Central Asia, Theses of reports*: 26–28. Tashkent (in Russian).

- ・ Rakhmonov, Kh. U., Suyunov S. S., Aslanov A. P. 2021. New Information about the Mingtepa City Monument. *Middle European Scientific Bulletin* 16: 133–144.
- ・ Smirnova O. I. 1981. Catalogue of Sogdian Coins, Moscow (in Russian).